

「みつはし書店」

人物

三橋亮（38）書店の主

三橋茜音（37）三橋の妻、看護師

篠塚蓮（17）書店の常連客、三橋の友人

酒井陽介（39）三橋の親友

小木進（78）客

○東京都・小平市・全景（朝）

〒・東京都・小平市

桜が咲き始めている。

○同・アパート・外観（朝）

3階建てのオレンジ色のアパート。

○同・三橋家・ドア外（朝）

『308三橋』のネームプレート。

○同・リビング・中（朝）

シックで整頓されている部屋。

対面式のカウンターキッチン。

キッチンカウンターの上面にある卓上カ

レンダーは『3月』。

畳の部屋が隣にある。

○同・畳の部屋・中（朝）

仏壇が置いてある。

三橋弘と三橋春子の笑顔の遺影。

お位碑には『三橋 抃 享年五十五 二〇一〇年三月二〇日』『三橋 春子 享年五十四 二〇一〇年三月二〇日』の文字。

隣にはみつはし書店の前で撮影された若い頃の三橋 抃と三橋 春子の笑顔の写真が置いてある。

三橋 亮（３８）が仏壇に手を合わせる。浮かない表情で仏壇の前を離れる。

○同・リビング・中（朝）

ソファーに腰を下ろして、ぼんやりしている三橋。

茜音の声「ただいま」

三橋 茜音（３７）が欠伸をしながら入って来る。

三橋は茜音の顔を見る。

三橋「お帰り、夜勤お疲れ様」

茜音「ありがと」

三橋「コーヒー飲む？」

茜音「飲む」

三橋「じゃあ淹れるね」

茜音「助かる」

ソファーに腰を下ろす茜音。

茜音「ところでさ、先月の売り上げはどうだったの？」

○同・キッチン・中（朝）

綺麗に整頓されているキッチン台。

コーヒーマーカーを操作している三橋。

三橋「なかなか伸びなくて……」

○同・リビング・中（朝）

ソファーでスマホをいじりながら、た

め息をつく茜音。

茜音「そんなんでも続けられるの？」

○同・キッチン・中（朝）

洗い物をしている三橋。

三橋「大丈夫だよ。常連のお客さんはいるし」

コーヒーマーカーが音を鳴らしている。

○同・リビング・中（朝）

ぼんやりとスマホを眺めている茜音。

茜音「何とかなってないから今の状況がある
んでしょ」

キッチンから出て来る三橋。

手にはマグカップを持っている。

三橋「でも、常連さんや街の人たちの為にも
出来る限り続けたいんだ」

マグカップを茜音の前に置く。

茜音「綺麗事ばっか言って」

三橋「そうかもしれないけど」

三橋の顔をじっと見つめる茜音。

茜音「年下で本読んでる人なんていないよ」

三橋「それはさすがに主語デカすぎだよ」

茜音「デカくないって。私の看護師の収入だ
けじゃ限界あるからね？」

三橋「分かってる。申し訳ないって思ってる
よ。でも……」

茜音「あーもう朝からうじうじとく少しでも
儲ける努力してよね」

茜音は呆れ顔でそっぽを向く。

三橋「ごめん、仕事行って来ます」

リビングを出て行く三橋。

○小平市・学園一番街（朝）

Ｔ・小平市

駅のすぐ傍にある商店街。

街灯の柱に『学園一番街』の看板。

居酒屋、薬局、衣料品店など様々な店
が立ち並んでいる。

閉店しているお店も所々にある。

ぼんやりした表情で歩いている三橋。

反対側から浮かない表情で歩いてくる

制服姿の篠塚蓮（１７）。

立ち止まる篠塚。

篠塚「あ、三橋さん」

笑顔で立ち止まる三橋。

三橋「ああ、蓮くん。おはよう」

篠塚「おはよう」

三橋「今日も来る？」

篠塚「もちろん行く！」

三橋「じゃあ待ってるね」

篠塚「うん」

嬉しそうに笑い駅へ歩いて行く篠塚。

手を振り前へ歩いていく三橋。

三橋「はあ」

小さくため息をつく。

○同・線路（朝）

四両編成の赤い電車が走っていく。

○みつはし書店・外観（朝）

屋根の上に『みつはし書店』の看板。

商店街の一番奥にある小さな書店。

○同・店内（朝）

こぢんまりとしている店内。

三橋はレジカウンター内に置いてある
立て看板を持ち外へ出る。

○同・外（朝）

『OPEN』と記載されている立て看
板を入り口前に置く三橋。

○学園一番街（朝）

行き交う人々。

○みつはし書店・店内

レジカウンター内でぼんやり外を眺め
ている三橋。

三橋はレジ台の横にある引き出しから
バインダーファイルを取り出し開く。

『3月の売り上げ』と記載されている
書類を眺める。

隣に記載されている『2月の売り上げ』
に比べて低くなっている。

頭を抱え唸る三橋。

○学園一番街

酒井陽介（39）がみつはし書店へ向かって歩いている。

○みつはし書店・外

店内に向かって手を振っている酒井。

○同・店内

ドアの外にいる酒井に気づく三橋。

三橋「陽介？」

店内へ入って来る酒井。

酒井「よっ！」

右手を上げて笑顔の酒井。

カウンターから出て来る三橋。

三橋「どうした？ 仕事は？」

酒井「これも仕事の 일환」

三橋「はあ？」

酒井「いや真面目な話。今、時間平気か？」

三橋「うちはいつでも暇ですから」

酒井「おいおい大丈夫かよ」

三橋「ごめん、それで話って？」

酒井「あのさ、一つ提案があって」

酒井はバッグから一枚の企画書を取り

出す。

三橋「ブックカフェ企画？」

酒井「そう。俺さバリスタやってるじゃん？」

三橋「うん。陽介の淹れるコーヒー美味しい

よね」

酒井「サンキューーそんでさ、そろそろ自分の
店もちてーなってるって」

三橋「へえ、すごいな！」

酒井「でも一人じゃ不案だし上手く行くかも

わかんねーし」

三橋「それで俺と？」

酒井「おう、親友のお前と一緒にこの店改
してブックカフェ出来たらお互いにとっ
もいっかなーって思ったんだ」

俯く三橋。

店内を見渡す酒井。

酒井「難しい状況なんだろ？ この前スー

パーで茜音さんに会った時ぼやいてたぜ」

三橋「そう、なのか」

酒井「茜音さんの為にもさ、一度考えてみてくれよ」

ニカツと笑う酒井。

三橋「ありがとう、少し考えてみるよ」

酒井「じゃ、また連絡するな」

手を振り店を出て行く酒井。

カウンターの上に置かれたチラシを見

つめる三橋。

三橋「ブックカフェ、かあ」

小さくため息をつく。

○学園一番街（夕）

行き交う人々。

○みつはし書店・店内（夕）

篠塚が入って来る。

篠塚「こんばんはー」

三橋「いらっしやい」

レジカウンター内で手をあげて会釈する三橋。

篠塚「お客さん来た？」

三橋「蓮くんの前に二人だけ」

篠塚「買ってくれた？」

三橋「一人はね」

篠塚「俺が言うのもなんだけど平気？」

心配そうな表情で三橋を見る篠塚。

うーんと顎に指を当てる三橋。

篠塚「三橋さん？」

三橋「実はさっきね……」

○空（タ）

カラスが飛んでいる夕焼け空。

○みつはし書店・店内（タ）

椅子に腰を下ろしている篠塚と三橋。

怪訝な表情の篠塚。

篠塚「ブックカフェ……？」

三橋「うん」

篠塚「三橋さんブックカフェ好きなの？」

三橋「いや行った事はないけど。今人気なんだよね」

篠塚「俺は嫌だなあ。純粋な本屋が俺は好きだよ」

しよんぼりと俯く篠塚。

三橋「考えさせてくれとしか返事してないから！俺だってこのままがいいし」

篠塚「店が儲かればブックカフェにならずにすむんだよね？」

三橋「え？あ、うん。そうだけど」

篠塚「じゃあ俺、明日から協力するよ！」

三橋「え、協力って……」

立ち上がる篠塚。

篠塚「絶対なくさせないから！また明日！」

スタスタと店を出て行く篠塚。

茫然と入口を見つめている三橋。

三橋「蓮くん……」

○三橋家・リビング・中（夜）

ソファーに横になりスマホを眺めている茜音。

ピコンと『佳織』からラインが入る。

茜音「珍しい、なんだろう？」

トーク画面を開くと『子どもが生まれました！』の文面の後に子どもの写真。

茜音「わくかわいい！」

茜音は、返信を打つ。

『おめでとうゝ！　かわいい！』

既読マークがつき、ありがとうのスタンプが入る。

茜音「良いなあ」

ぽつりと呟く茜音。

玄関の鍵が開く音が聞こえる。

のそのそと起き上がる茜音。

三橋の声「ただいま」

リビングへ入って来る三橋。

茜音の視線はスマホに向けたまま。

茜音「おかえり」

三橋は荷物を置き椅子に座る。

三橋「今日さ、陽介が店に来たんだよ」

茜音「そうなんだ」

三橋「陽介に店の事話したでしょ。あんま外で言わないでよ」

茜音「ただの世間話よ」

不満そうに答える茜音。

三橋「陽介だったからまだ良いけどさ」

茜音「それで、酒井さん何の用で来たの？」

茜音はスマホをいじりながら聞く。

三橋「ブックカフェと一緒にやらないかって誘われたんだ」

茜音はバツと勢いよく三橋を見る。

茜音「もちろん賛成したのよね？」

三橋「考えさせてくれて言った」

目を見開く茜音。

茜音「何でよ！ 良い話じゃない！」

三橋「良い話なのは分かってるよ。だけど」

茜音「だけど何よ？ せっかく親友が誘ってくれているのよ？」

三橋「大切な場所なんだよ。そう簡単に改造

なんて出来ない」

茜音「店が完全に無くなるより良いじゃない」

三橋「無くなるって決めつけないでよ」

茜音「あーもー友達は何子も出来たり旅行行ったりしてるってのにうちはどうしてこ
うなのよ！」

三橋「今それ関係ないよな」

不満顔な三橋。

茜音「関係なくない！ もう寝るっ」

茜音は机をバンツと叩きリビングを出
て行く。

三橋「何なんだよ」

小さくため息をつく三橋。

三橋「茜音だって昔は本屋好きだったのに」
俯く三橋。

○みつはし書店・外（朝）

『OPEN』の立て看板。

○同・店内（朝）

笑顔で入って来る私服姿の篠塚。

篠塚「やつほゝおはよう！」

三橋「おはよう」

篠塚「今日はねとある事に挑戦してみようと思うんだ！」

三橋「とある事？」

篠塚「うん、まあ見ててよ！」

につこりと微笑む篠塚。

○線路（朝）

走っていく四両編成の黄色の電車。

○みつはし書店・外（朝）

中年の男性が入り口付近でうろうろしている。

○同・店内（朝）

三橋と篠塚は外にいる男性に気づく。

椅子から立ち上がる篠塚。

篠塚「昨日、この店にどうして人が入らない

か考えてみたんだ」

三橋「う、うん」

篠塚「人が少なくて入りにくいんだと思う」

三橋「な、なるほど？」

篠塚「一人でもお客さんいるって分かれれば入って来てくれると思うよ」

微笑み篠塚は、うろうろし始める。

入り口付近の棚の前で立ち止まって立ち読みしている篠塚。

ドアが開き中年男性が入って来る。

冷静にお辞儀をする三橋。

三橋「い、いらっしやいませ」

男性はレジとは反対側の棚を見始める。

立ち読みをしている篠塚。

男性が手に分厚い辞書を一つとケースに入った上下巻セットの本をレジへ持って来る。

レジ台に置かれた本。

○同・外（朝）

紙袋を手を持ち去っていく男性。

○同・店内（朝）

レジカウンター内でガッツポーズをしている三橋。

三橋「やったー！」

篠塚「ね、俺が言った通りでしょ！」

レジカウンター前で笑顔を浮かべている篠塚。

ハイタッチをする三橋と篠塚。

三橋「入りにくいってのは考えた事なかった」

篠塚「俺はさ静かな店が入りやすいけど逆の人もいるかもなって思ったんだ。だから今日は俺が呼び込みとか色々してみるよ！」

三橋「いやいや悪いよ。バイト代も払えないのに」

ぶんぶんと手を横に振る三橋。

真剣な表情の篠塚。

篠塚「お金なんていらなから！　ここが無くなるのが一番困るんだよ」

笑って外へ出る篠塚。

申し訳なさそうな顔で篠塚の背中を見つめる三橋。

三橋「俺も頑張らないと、だよなあ」

スマホを取り出す三橋。スマホのホーム画面。

慣れない手つきでアプリストアのアイコンを押し、インスタをダウンロードする。

三橋「今はやっぱこれなんだろうな」

アカウント作成画面。

アカウントを作成する三橋。

○同・外（朝）

呼び込みをしている篠塚。

老夫婦が店へ入って来る。

○同・店内

壁掛け時計は12時を指している。
5人の客が本棚を見ている。

○学園一番街

賑わっている商店街。

○みつはし書店・店内

三橋と篠塚だけになっている店内。

嬉しそうな三橋。

三橋「ここ最近で一番売れた日になったよ！」

篠塚「ほんと？ やっぱ呼び込みって効くん
だね」

三橋「だね」

篠塚「こうやって続けて行けば売りに繋が
がっていくかなあ」

真剣な表情で店内を見渡す篠塚。

スマホを取り出す三橋。

三橋「実は俺もさもう少し何か出来ないかっ
て考えてインスタのアカウント作ってみた
んだ」

インスタ画面を篠塚に見せる三橋。

画面をじっと見る篠塚。

篠塚「本当だ、インスタ！ でも三橋さんら

しくないね。どうしちゃったの？」

三橋「蓮くんみてたら俺も頑張らないとって
思ってたんだ」

篠塚「そっかー！ 三橋さんの役に立てたなら良かったよ！」

にっこりと笑う篠塚。

篠塚「今日の分も少しは寿命に繋がった？」

三橋「うん、本当にありがとう」

篠塚「ううん！ 俺が好きでやってるだけだから気にしないでよ！」

三橋「俺もインスタの更新頑張ってみるよ」
笑い合う三橋と篠塚。

○三橋家・リビング・中（夜）

リビングに置いてあるキャビネットの
引き出しの中を整理している茜音。
中にはアルバムがたくさんあり一つ手
に取り開く。

茜音「うわ、懐かしい写真」

茜音と三橋の20代の頃の写真が貼られている。

写真の下には『文芸サークルのみんなで』のコメント。

茜音「最近全然本読まなくなったなあ」

三橋の写真はどれにも本と一緒に映っていて笑みが零れる茜音。

茜音「亮くんは、ずっと変わんないなあ」

玄関の鍵が開く音が聞こえ引き出しにアルバムを仕舞う。

リビングへ入って来る笑顔の三橋。

三橋を不思議そうに見る茜音。

茜音「どうしたの？ 何か良い事あった？」

三橋「分かる？ 今日ここ最近で一番良い売り上げ出てさ」

茜音「へえ、良かったじゃない」

三橋「蓮くんが協力してくれてさ」
首を傾げる茜音。

茜音「れん、くん？」

三橋「うん、常連客の蓮くん」

茜音「ん？ え、おじいさんじゃないの？」

三橋「何で？ 蓮くんは高3だけど？」

茜音「は？」

三橋「あれ言っでなかったっけ？」

茜音「聞いた事ないし、常連とかいうから大

人だと思っでたのよ！」

三橋「それは偏見だろ」

茜音「今、そーいう話をしてるんじゃない！」

茜音の怒声にビクツと肩が揺れる三橋。

茜音「座りなさい」

三橋「は、はい」

おずおずと椅子に腰を掛ける三橋。

目の前に座る呆れ顔の茜音。

茜音「今までの話の感じだとその子、平日も

休日も店に来てるって事よね？」

三橋「う、うん。店が唯一の居場所だって言

ってて……」

茜音「その子の事情は分からないけど、高3

って事は受験もあるはず。親御さんはどう

せ知らないんでしょ？」

小さく頷く三橋。

大きなため息をつく茜音。

茜音「あなたさ、その子の為とか言ってるけどさその子の気持ち、利用してるだけじゃないの？」

三橋「そ、そんなことないっ」

茜音「あるでしょ。純粋な気持ち利用してたらだら先延ばしにする理由にしてるって」

うっと言葉が詰まる三橋。

茜音「分かった？ とりあえずちゃんと蓮くんと話す事。訴えられても知らないよ？」

呆れ顔の茜音。

三橋「ごめん、ありがとう」

項垂れる三橋。

茜音「じゃあ、私は寝るから」

三橋「おやすみ」

リビングを出て行く茜音の背中を申し訳なさそうに見つめる三橋。

○みつはし書店・外（朝）

立て看板を出してからスマホを取り出し写真を撮る浮かない表情の三橋。

三橋「とりあえず投稿してみよう……」

インスタを開く。

『オープンしました』と打ち込む。

○同・店内（朝）

棚の整理をしている三橋。

元気よく店へ入って来る篠塚。

篠塚の声「おはよーございます」

振り向く三橋。

三橋「蓮くんおはよう」

篠塚「今日もお客さん来るように頑張るね！」

にっこりと微笑む篠塚。

三橋は真剣な表情で篠塚を見る。

三橋「その前にちょっと話しておきたい事が

あつて……」

首を傾げる篠塚。

○線路（朝）

走っていく四両編成の赤い電車。

○みつはし書店・店内（朝）

椅子に腰を下ろしている三橋と篠塚。

浮かない表情の篠塚。

篠塚「そんな事本当に気にしなくて良いのに」

三橋「そういう訳にもいかないんだよ」

篠塚「親はさ俺に無関心だから帰りが遅くても土日ずっと外にいても気にしてない」

三橋「……そう、なんだ」

篠塚「うん。受験はあるし大学受けるけど俺頭良いからさ別に今から詰めなくても平気」

じっと三橋を見る篠塚。

篠塚「友達だっていないからここしか俺の居場所はないんだ」

三橋「蓮くん……」

篠塚「迷惑なら来るのやめるけど……」

三橋「迷惑じゃないよ！　ただ心配なだけで」
篠塚「俺は大丈夫だよ！」

立ち上がる篠塚。

篠塚「そーいう事だから今日も呼び込みする

ねっ！」

満面の笑顔の篠塚。

店を出て行く篠塚の背中をじっと見つ

める三橋。

三橋「……ありがとう」

三橋も立ち上がりレジを開ける。

ポケットの中でスマホが通知を告げる。

スマホを取り出す三橋。

『酒井』からラインが入っている。

『まだ考え中？』

とメッセージが表示されている。

メッセージを眺め俯く三橋。

三橋「うーん」

○三橋家・リビング・中（朝）

ソファーで横になっている茜音。

茜音「ちゃんと話したかなあ」

天井を見つめる茜音。

○みつはし書店・外

楽しそうに呼び込みをしている篠塚。

○同・店内

三人の客が本棚を眺めている。

一人の男性が文庫本を一冊買っていく。

レジを打つ三橋。

三橋「ありがとうございますた〜」

○同・外

人が疎らになっている商店街。

○同・店内

店内へ入って来る篠塚。

篠塚「日曜なのに人少ないねえ」

三橋「うーん、インスタもあんま効果なしか」

篠塚「本屋良いのになあ」

三橋「蓮くんみたいな若い子がそう言ってくれるのすごく嬉しいよ」

篠塚「俺だけが思っても売り上げに繋がら

ない……」

泣きそうな表情を浮かべている篠塚。

三橋は篠塚の肩に手を置く。

三橋「蓮くんがいてくれてすごく助かってる

よ。ありがとう」

篠塚「三橋さん……」

三橋「ご飯にしようか」

頷く篠塚。

○三橋家・リビング・中（夜）

ソファーで横になっている茜音。

リビングへ入って来る三橋。

茜音は起き上がり三橋を見る。

茜音「蓮くんに話した？」

三橋「話した、けど……」

茜音「けど、何よ？」

○アパート・外観（夜）

○同・三橋家・リビング・中（夜）

項垂れている三橋と呆れ顔の茜音。

茜音「はあ？ この期に及んでまだ頑張りた
いってあなたアホなの？」

三橋「分かってるけど！ でも、インスタも
作ったばっかだし、もしかしたら……」

茜音「ないよ。早くブックカフェやるって返
事しなさいよ。他に行かれちゃうよ？」

三橋「後一週間だけ様子をみたいんだ」

真剣な表情で訴える三橋。

茜音「家族の私より他人の気持ちを優先させ
るのね」

大きなため息をつく茜音。

三橋「ごめん、店の事に関してはどうしても
譲れないんだ」

茜音「そんなに店が大事？」

三橋「大事だよ。だって……」

茜音「（遮って）勝手にすれば！」

泣きそうな顔でリビングを出て行く茜

音。頭を抱える三橋。

三橋「ごめん……茜音。一週間だけ許して」

カレンダーを見る三橋。

○学園一番街（夕）

壁に『商店街一番奥に書店あります』
と記載したみつはし書店の案内ポスターを貼る制服姿の篠塚。

○みつはし書店・店内（夜）

一人の若い男性客が棚を眺めている。

○同・店内（朝）

棚を見渡してうーんと唸っている三橋。
明るい表紙の文庫本を手前の棚に持ってきてみる。

カウンターで『店長おすすめコーナー』
と紙に書き一番手前の棚の壁に貼る。

○同・外

若い女性が立ち止まり中を伺うが過ぎ去ってしまう。

○同・店内（夕）

うろうろしている制服姿の篠塚。

○同・店内（夜）

スマホを眺めている三橋は小さくため息をつく。

反応ゼロのインスタ画面。

三橋「宣伝って難しいなあ」

浮かない表情の篠塚。

篠塚「色々やってみても変わらないね」

三橋「そうだね……。何でかなあ」

篠塚「俺に友達がいればなんか変わったかもしれないのに」

三橋「蓮くん……。そんな気持ちにさせちゃつてごめんね」

首を振る篠塚。俯く三橋。

○三橋家・リビング・中（朝）

卓上カレンダーは『4月』。

ソファーに座り天井をぼんやりと見つ

めている三橋。

○同・外（朝）

桜が舞っている。

○三橋家・リビング・中（朝）

スマホを取り出しラインを開き『酒井』と表示されているトーク画面に文字を打ち込む三橋。

『今晚会える？ 話したい事がある。』
既読マークがつきOKのスタンプがおくられてくる。

無言でリビングへ入って来る茜音。

三橋はスマホを置き茜音を見る。

三橋「おかえり」

茜音「……」

茜音は三橋を無視し寝室へ入ろうとする。

三橋「今日、陽介に会って来るよ」

茜音「……そう」

寢室へ入って行く茜音。

小さくため息をつく三橋。

○一橋学園駅北口・外観（夜）

改札口の上に『一橋学園駅北口』の看板。

○同・ホーム（夜）

混雑しているホーム。

電車に乗り込む三橋。

○走っている電車・車内（夜）

混雑している車内。

ドアに寄りかかっている三橋。

車内を見渡す。

スマホをいじっている若い男性。

パズルゲームの画面が表示されている。

イヤホンをつけてスマホを横にして動

画を見ている女性。

車内から視線を反らし窓の外を見る。

○ 国分寺駅・外観（夜）

丁・国分寺駅

○ 同・セレオ・国分寺・外観（夜）

10階建ての駅ビル。

ビルの壁に『セレオ国分寺』の文字。

○ 同・1階・カフェ・シクラメン・外観（夜）

入口の上に『カフェ・シクラメン』の
看板。

○ 同・外（夜）

入り口前でうろうろしている三橋。

スマホを手に操作しようとする三橋。

エプロンをつけた制服姿の酒井が店内
から出て来る。

三橋の肩をポンツと叩く酒井。

酒井「亮」

ビクツと肩を揺らして振り向く三橋。

三橋「うわっびっくりした」

酒井「ごめんごめん、来てくれてサンキュー」

三橋「いやこっちこそ急にごめん」

酒井「大丈夫、お前にコーヒー淹れたら上がらせてもらえる事になってるから！」

三橋「ありがと」

酒井「特別席用意してあるぜ」

三橋「何か恥ずかしいな」

照れ臭そうな三橋。

嬉しそうに案内をする酒井。

○同・店内（夜）

木目調のナチュラルで広々としている

店内。女性客が多い。

○同・キッチン・中（夜）

酒井と他に二人のスタッフがいる。

酒井は慣れた手つきでコーヒーを淹れ始める。

店内では、若い女性客が楽しそうにスマホで写真を撮っている。

奥のテーブル席でパソコン作業をしているサラリーマンがいる。

若いカップルが自撮りをしていたりと楽しそうな雰囲気。

優しい表情でコーヒーを淹れている酒井。

じっと見つめる三橋。

○同・店内（夜）

カウンター越しに酒井が三橋の前にコーヒーカップを差し出す。

酒井「どうぞ」

受け取る三橋。

三橋「ありがとう、すごい良い匂い」

酒井「だろ？」

ニカッと笑う酒井。

酒井はカウンターの上にもう一つコーヒーカップを置く。

エプロンを取り酒井はキッチンから出て来る。

三橋の隣に腰を下ろす酒井。

人が疎らになつてきている店内。

コーヒーを飲む三橋。

三橋「陽介のコーヒーはやっぱり美味しいな」

酒井「ま、正確には俺のじゃないけどさ」

三橋「でも本当に他の店と違う気がする。素

人の俺でも分かるよ」

酒井「サンキュー」

コーヒーを飲んでいる三橋と酒井。

酒井「それで話つてのはブックカフェの事

だよな？」

三橋「うん。色々考えたし宣伝とかやってみ

たけどやっぱり上手いなくて……」

酒井「そっか」

三橋「陽介とブックカフェやるのも良いなっ

て思い始めたんだ」

前のめりになる酒井。

酒井「じゃあ！」

三橋「でも、ここに来てやっぱり違うだろって
なってる」

酒井「はあ？」

三橋「さつき陽介がコーヒー淹れてる姿見て
さ伝わってきたんだよ。お前も本当はブツ
クカフェでなんて満足できないだろ？」

じっと酒井を見つめる三橋。

はっとなり頭を抱える酒井。

酒井「あくやっぱ長年の付き合いのお前には
わかつちまうか？」

三橋「分かるよ。俺も妥協出来ないから。だ
からブツクカフェはやらない」

酒井「そう、だな」

三橋「お互いに本当の気持ちを大事にしよう。
綺麗事って言われるだろうけどさ」

ふっと笑う三橋。微笑む酒井。

酒井「ああ。その方が絶対後悔しないよな」

三橋「うん、後悔だけはしたくない」

酒井「でも茜音さん許してくれるのか？」

三橋「今の店のまま閉店させようと思ってる。
その後の事はこれから考えるけど」

酒井「……そっか。なあ、それならさ閉店イ

ベントやるのはどうだ？」

三橋「閉店イベントか、確かに良いかも。あ、それならさ陽介も手伝ってくれないか？」

酒井「え？」

三橋「この前見た記事で良いなーって思ったのがあったんだ！」

笑顔の三橋と首を傾げる酒井。

○三橋家・リビング・中（朝）

テーブルで向き合って座っている三橋

と茜音。茜音は呆れ顔。

茜音「結局ブックカフェは断ったのね」

三橋「うん、お互いに本当にやりたい事じゃなかったんだ」

茜音「そう」

三橋「最後まで今のみつはし書店のままでいい。だって、あそこは……」

俯く三橋、優しい顔になる茜音。

茜音「……私たちが出会った場所だものね。残したい気持ちは分かるよ」

三橋「覚えてたんだ」

茜音「当たり前でしょ。でも、そんな理由だけで続けられるほど世の中甘くない」

三橋「分かってる。だから、次の土曜日までにする。今日ちゃんと閉店のチラシも貼る」

茜音「そっか」

三橋「ただ最後に閉店イベントをやらせて欲しい」

茜音「良いんじゃない？」

三橋「ありがとう」

頭を下げる三橋。

○みつはし書店・外（朝）

『みつはし書店』の看板。

カバンからクリアファイルとガムテ―

プを取り出す三橋。

中には『閉店のお知らせ』の紙。

紙を取り出しドアに貼る。

篠塚の声「閉店、するんですか……」

振り向く三橋。泣きそうな表情の篠塚

が茫然と立っている。

三橋「うん。ごめんね。でもね、最後に閉店イベントするから蓮くんにも手伝ってもらえたらなって思ってるんだけど」

無言で走り去ってしまう篠塚。

三橋「蓮くん……ごめん」

○ 駅前の道（朝）

桜が散っている。

○ みつはし書店・店内（朝）

文学作品、ライトノベル、学術書などの本を手に取りカゴに入れて行く三橋。
空の棚。

入り口に置いてある本が入れられているカゴ。レジ台の上には値札。

○ 同・外（夕）

折りたたみ式の台車が置いてある。
ドアをトントンと叩いている酒井。

○同・店内（夕）

店内に入って来る酒井。

酒井に駆け寄る三橋。

三橋「陽介！」

酒井「いよいよ明日だな」

三橋「うん。手伝い助かるよ」

笑顔の三橋と酒井。

○学園一番街（夜）

トボトボと歩いている篠塚。

○三橋家・リビング・中（夜）

ソファーに寝転びスマホをいじっている茜音。

茜音「うーん」

『町内会』と表示されたトーク画面。

メッセージを打ち込む茜音。

『明日、みつはし書店が閉店イベントとして移動販売を駅前の公園で行うのでよかったです！』

送信ボタンを押す茜音。

○みつはし書店・外（朝）

入口前で立ち止まり深呼吸をする篠塚。

○同・店内（朝）

篠塚に気づく三橋。

三橋「蓮くん！」

手を振るが篠塚は視線を反らす。

じっと篠塚を見ている酒井。

酒井「お、あの子が例の高校生？」

三橋「うん、とても良い子なんだ」

酒井「何で入ってこないんだ？」

三橋「閉店の道選んだから失望させちゃった

のかも」

俯く三橋。

酒井「でも来てるって事は思うところがあっ

たんだろ。よし、俺が助け船出してやるよ」

酒井はニツと笑いドアを開けに行く。

顔を上げる三橋。

ビクツと肩が揺れる篠塚。

篠塚の前に立つ酒井。

酒井「どうもー酒井陽介です！」

篠塚「……」

酒井「入りなよー亮が寂しがってんぞー」

おずおずと店内へ入って来る篠塚。

篠塚「……三橋、さん。この前は無視してすみませんでした！」

三橋「ううん、俺の方こそ閉店を選んでごめんね」

篠塚は首を振る。

篠塚「俺、ポスター作ってきた！」

三橋「え？」

篠塚「やっぱりこのまま何もしないのは嫌で、俺に出来る事ないかなって思って」

トートバッグからポスターを取り出し
カウンターの上に置く篠塚。

篠塚「役に立てるかわかないけど」

三橋「すごく助かるよ、ありがとう！」

篠塚「良かった。たくさん刷ったからあちこ

ちに貼ろう！」

笑顔でポスターを見つめる三橋と酒井。

酒井「すごい上手いじゃん。俺が店出す時にも頼もうかな」

篠塚「バイト代くれるなら作りますよ」

酒井「何？ 俺にはつれないじゃん」

篠塚「だって、ブックカフェの人でしょ？」

酒井「その話とはつくに無になってるし」

篠塚「でも！」

三橋「まあまあ二人とも仲よくしよう！」

篠塚と酒井を宥める三橋。

ふっと笑う酒井。

酒井「喧嘩してる時間がもったいないな」

篠塚「そうですね」

三橋「じゃあ、準備始めようか」

拳を突き合わす三橋、篠塚、酒井。

篠塚はポスターを持って外へ出て行く。

○学園一番街（朝）

商店街の壁に貼られている『みつはし

書店閉店イベント移動書店のお知らせ』

のポスター。

チラシ配りをしている篠塚。

篠塚「10時から駅前公園で移動書店が開き

ます！ コーヒーもありますよ」

チラシには酒井の名刺もクリップでついている。

小木進（78）がチラシを受け取る。

○みつはし書店・外（朝）

台車に本を積み終える三橋。

三橋「行こうか」

酒井「おう！ 最高の一日にしようぜ」

三橋「うん」

店内の電気を消して鍵を閉める三橋。

台車を押して歩き出す三橋と酒井。

○学園駅前公園・中（朝）

公園前に『学園駅前公園』と刻まれた石銘板。

折り畳み式の机に本を並べて手元に電卓とコインケースを置いている三橋。隣にコーヒーマーカーなどの準備をしている酒井。

三橋「よしっ準備は完了」

酒井「後は客が来るかだな」

三橋「今のところは来そうな気配がないな」

辺りを見渡す三橋。

篠塚の声「駅前で移動書店やってまーす！

ついでにコーヒーもありますよ」

顔を見合わせる三橋と酒井。

三橋「俺たちも頑張らないとだな」

酒井「俺のコーヒーはついでなのが気に障る

が仕方ないな」

ふっと微笑む酒井。息を吸い吐く三橋。

三橋「みつはし書店です！ 閉店セールなので安いですよ！」

酒井「一緒にコーヒーもいかがですか」無料ですよ！」

三橋と酒井の声に数人が立ち止まるも

なかなか前まで来ない。

三橋「うーん」

唸っているとチラシを手に持った小木が近づいて来る。

小木「移動書店が良いねえ」

三橋「ありがとうございます、立ち読みだけでも良かったら」

酒井「コーヒー飲めるようでしたらお淹れしますよ」

小木「是非淹れて欲しいね」

酒井「かしこまりました」

酒井がコーヒーを淹れ始める。

三橋を見る小木。

小木「みつはし書店無くなってしまうのか」

三橋「はい」

小木「買いに行けなくてすまないねえ」

三橋「いえ……」

小木「どうにも最近足が痛くて、なかなか遠くまで歩けないんだよねえ」

三橋「そう、だったんですね」

小木は机を見渡し一冊の本を手取る。

小木「おお、この本は……」

三橋「ああその本ずっと棚の奥で眠っていたんですよ。片付けてたら出て来て……」

小木「ずっと探していた本なんだ」

三橋「ほんとですか？」

小木「ああ、出会えて良かった」

小木は笑顔でお金を払い本とコーヒーを受け取りベンチに腰を下ろす。

酒井「良かったな」

三橋「うん」

ベンチに座る小木を見て嬉しそうに笑う三橋。

○学園一番街

チラシ配りをしている篠塚。

○学園駅前公園・中

数人の客がベンチに腰を下ろしている。

三橋は辺りを見渡して小さくため息を

つく。

三橋「結局こんなものなのかな」

酒井「まだ昼だしこれから増えるだろ」

三橋「だと良いけど」

茜音の声「亮くーん！」

はっと振り向く三橋。

三橋「茜音？」

茜音の周りにはたくさんの年配の男女、
30代、40代くらいの男女がいる。

三橋「え、茜音？ その人たちは？」

茜音「町内会の方々！」

にっこりと微笑む茜音。

三橋「茜音、ありがとう！」

茜音「別に。皆さんが興味あるって言うから
連れて来てあげただけよ」

三橋「それでもありがとう！」

酒井「あ、茜音さん！ 茜音さんも良かった
らコーヒー飲んでください！」

茜音「じゃあ貰おうかな」

酒井の机の前で町内会の人たちに接客
をしている三橋を眺めている茜音。

コーヒーを茜音に手渡す酒井。

酒井「亮って本の話してる時が一番輝いてま
すよねえ」

コーヒーを受け取りふっと微笑む茜音。

茜音「ほんとにね。亮くん、私お昼買っ
て来るね」

三橋「助かるよ」

ひらひらと手を振って公園を出て行く

茜音。

賑わっている公園。篠塚が入ってくる。

篠塚「すごい！ 本が好きな人ってこんなに
いたんだ……」

涙目になりながら公園を見渡してい

篠塚。

酒井の声「おい、蓮くんこっち手伝って
くれ！」

三橋と酒井の前に列が出来ている。

篠塚「今行く！」

篠塚は本の在庫を段ボールから取り出し手伝っている。

楽しそうに接客をしている三橋。

三橋「ありがとうございます！」

ふうと息を吐く三橋。

酒井「ようやく列が引いたな」

三橋「今の内にお昼にしようか」

紙袋を持って公園へ入って来る茜音。

茜音「お待たせ」

三橋「ありがとう」

茜音「どういたしまして。あ、その子が噂の

蓮くん？」

篠塚「はい、篠塚蓮です。亮さんにはいつも

お世話になっています」

茜音「こちらこそ夫と仲良くしてくれてあり

がとう」

にっこりと微笑む茜音。

照れ臭そうな篠塚。

篠塚「三橋さん、俺決めました」

三橋「ん？」

篠塚「大学入ったら本好きが集まるサークルに入ります！　後、本屋でバイトします」

三橋「良いと思う！」

篠塚「でも、三橋さんがまだどこかで本屋をやるならその時は三橋さんの所にすぐに行きます」

三橋「あははうありがとう」

笑い合う三橋と篠塚。酒井は手を叩く。

酒井「よし、いつまた混むか分かんないし飯にしようぜ！　コーヒーもあるぞ」

移動書店の机の前に折り畳みの椅子を並べて腰を下ろす三橋、茜音、篠塚、

酒井。

孫に読み聞かせをしているおじいちゃんおばあちゃん。

コーヒーを片手に読書好きのグループが盛り上がっている。

篠塚も輪に加わり笑顔。

その光景を笑顔で眺めている三橋。

三橋「この景色が見たかったんだ」

茜音「え？」

三橋「大学の文芸サークルみたいだろ？」

茜音「うん」

三橋「あの空間が大好きだったんだよ」

茜音「うん、私もなんか懐かしい気持ち」

ふっと微笑む茜音。

三橋「俺、新しい本の売り方を考えてみたい」

真剣な表情で茜音に訴える三橋。

茜音「亮くんはそう言うと思ったよ」

三橋「ごめん」

茜音「その代わり家事はやってよね？」

冗談ぽく睨む茜音。

三橋「も、もちろんだよ！ 何でもする！」

茜音「ま、仕方ないよね。亮くんは昔から本が一番なんだから」

三橋「茜音の事もちゃんと考えてるよ」

茜音「良いのよ本が一番で。そーいう亮くんを好きになったんだから」

三橋「茜音……」

茜音「やりたい事やったら良いよ。私も看護

師の仕事好きでやってるしね」

三橋「ありがとう、茜音」

茜音を見て笑う三橋。